
秋国に舞う迅影

北風小僧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋国に舞う迅影

【Nコード】

N4281T

【作者名】

北風小僧

【あらすじ】

16才の女子高校生、西村彩花が目覚めると、そこは火の海だった。

見覚えの無い場所で、何故か体は子供返り。

襲い来る盗賊、逃げる彩花、行き倒れた彩花を助けたのは拳法家の師弟だった。

01 盗賊団からの逃走（前書き）

誤字訂正しました。

01 盗賊団からの逃走

闇夜が赤く染まり、怒号と悲鳴が響く。
燃える村に蹄の音が聞こえる。

寝込みに家屋に火矢を射かけられ、炙りだされる人々。
逃げる村人の背に、容赦なく振り下ろされる剣。
往来は惨劇の末に、骸と血だまりに覆われていた。

「暑い」

燃える家の中、年の頃8つばかりの少女が呟く。
寝ぼけているのか、とろんとした目をこすり、徐に上半身を起こす。
明らかに状況を把握できていない少女は、このままでは煙に巻かれ
幼い命を落とすだろう。

「何？ 嘘、火事!？」

ようやく事態を悟ったが、時すでに遅し。
家には火が回り、8歳の子供が越えるには酷な炎が出口を塞いでい
る。

しかしそれ以前に、彼女はこの家の構造を知らず、脱出は困難を極
めていた。

（何で？ 学校から帰って、ソファでうたた寝していたはず…）

彼女の名は西村彩花。

つい先ほどまでは、日本の高校に通う16歳の女子生徒であった。
マラソン大会が近付き、体育の授業時間一杯を使ってグラウンドを

走らされたのだ。

運動音痴で体力のない彼女は、帰宅後リビングのソファに座り、そのまま心地よいまどろみに身を任せただった。

見覚えの無い部屋で火事と喧騒によって目覚めた彼女は、混乱の最中に有った。

「椿佳！ はやく、こっちへ！」

と、突然の呼びかけと共に、男の腕に抱きかかえられた。

男は炎に向かって走り出す。

（な、ちよつと、危ない！）

男の行動に目を見開いた彩花は、迫り来る炎に思わず硬く瞼を閉じた。

炎を抜けた彩花の頬に、秋の夜風が触れる。

収穫の季節を迎えたここ桃花村に、盗賊達は目を付けた。

もとより貧しい寒村である。金目の物など眼中になく、収穫を終えた食糧と、売り飛ばすための女子供が目当てであった。

「生き残りを探せ！」

「男は殺して、女、子供は浚え！」

盗賊の頭目だろう男が指示を出し、30人程の男たちが村人を襲う。

（うる…、つて！）

彩花を抱いた男の背に矢が突き立ち、鈍い音と振動が彩花に伝わる。

「く、ヒュッ！」

「は、うう！ 痛……」

男は彩花を抱いたまま転倒し、肺に矢が刺さったのか吐血する。が、苦痛に顔を歪めながらも彩花を立たせ、その細い両腕を強く掴む。

「椿佳、父さんも後から母さんと一緒に行くから。先に逃げなさい、振り返らずに。いいね？」

何が何だか分からない彩花だったが、危機的状況であることだけは理解できた。

一般人相手にここまでの費用を掛けて騙すようなテレビ番組も無いだろう。

「お父さん……」

椿佳というのが自分のことで、この男が椿佳の父親であることが何故か分かっていた。

これは夢だろうか、何かこんなシーンの有る映画を見たから、夢を見ているのか。

しかし最近では映画など見ていなかったし、似たようなシーンなど、いくらでもあるのに、どうしてこんなにもリアルな映像を見ているのか。

しかも映画のような客観的な視点ではなく、全て椿佳の眼から見た光景であった。

「大丈夫、すぐ行くから、早く、早く」

男は彩花を反転させ、強く背中を押す。

2、3歩たたらを踏み、振り返る彩花に男は、早く、逃げろ、生きろ、と叫ぶ。

訳も分らず彩花は涙を浮かべつつも、男に背を向け走り出した。

恐怖で一杯だった。

さほど高くない山の中腹にある桃花村から、行き先も考えず、遮二無二駆けた。

息が切れる、何度転んだか分からない。

何時間、どこをどの様に駆けたのか、いつしか山を下り荒野の街道に出ていた。

彩花の膝からは力が抜け、終には立ち上がる力を無くしていた。

2度、3度と、瞬間的に意識が遠のき、目の前が暗くなる。

空が白みかけている。もうすぐ日が昇り、朝を迎えるだろう。

(でも、これは夢？ ちゃんと戻れるの？)

抗えない倦怠感に、彩花は意識を手放した。

秋国の都、陽から東に向かって伸びる街道を歩く、2人の男の姿があった。

初老を超え、老境に差し掛かるうかという男に付き従うように、12、3歳程の少年が大きな荷物を抱えていた。

街道に日が昇り、穏やかな朝の光が降りそそぐ中、少年が何かを発見した。

「老師、あれを、人が倒れています」

「ふむ、まだ幼い子供のような」

少年荷物を放り出し、少女のもとに駆けた。
衰弱しているが、まだ息が有る。

「老師！」

「水を飲ませてやりなさい、ゆっくりだ」

荷物を放り出した少年の替わりに、その大きな荷物を軽々と担いだ男が水筒を差し出す。

少女の衣服は所々焦跡があり、体中に煤が付いている。

焦げた臭いからは、焼け出されて然程時間が経過していないことがうかがえた。

至る所を切り傷や切り傷を負っており、満身創痍の態である。

これは只事では無いかもしれん、と北側の山を見やると、中腹から煙が昇っていた。

「俊雷、あの山の中腹の桃花村は知っているな？」

「はい、何度か行ったことが有ります」

「何か大事が有ったかもしれん、ひとつ走り、様子を見てきてくれんか」

「わかりました。この子をお願いします」

「うむ、このような幼い娘が、ひどい目に有ったものだ」

少年は健脚を發揮し、二時間で戻ってきたが、その表情は見たくないものを見てしまったと雄弁に語っている。

「老師、村は賊に襲われたようで、残念ですが、生きている者は……」
「何という事か」

あごに手をやり、男はすこし考えるそぶりを見せる。
しかしこの優しい男がどのような行動をとるか、少年には分かり切
っていた。

「捨て置くのも忍びない、俊雷、この子を連れて帰るから、しばらく
面倒を見てやってくれ」

「わかりました」

少年は少女を背負い、男と共に街道を東に向けて歩き出した。

02 恩人、王泰海

「んー」

「どこだ、ここ。部屋じゃない」

目が覚めた彩花は、実に暢気な唸り声とともに上体を起こす。

自分の部屋では無い、見慣れない場所に戸惑いながら記憶の糸を手繰ると、盗賊と思しき集団から命からがら逃げてきた事を思い出す。夢じゃなかったんだ、そう思いながら寝台から抜け出すと、全身の筋肉痛と、転んで負った傷の痛みに可愛らしい眉をしかめる。

「痛い」

「体、ちっちゃくなってる？」

現代風でも和風でも無いその部屋に有っても、自分の視線がいやに低い。

着せられている衣服は裾や袖が大分余っている。

「そうか、そうだ。何故か椿佳ちゃんになってたんだ」

「鏡…、は無いか。昔っばいもんね」

盗賊団、父親の服装、街灯も電線も無い道を走って逃げたことを思い出す。

しかし、街灯の無い事が盗賊団から逃げおおせた要因の一つであることに、彩花は気付いていない。

（認めたくはないけど、これは、不思議の国のアリス的展開？）

（なんで体まで変わってる？ 入れ替わり？ 前世の記憶を追体験

？ それともマジで体が縮んだ？）

一連の不可解な現象を説明できず、ああでもない、こうでもないという頭をひねる。

(うさぎなんか追っかけてないよ、私？ 兵隊とか女王とか怖いよ？ てか帰りたいたい…)

この現象を引き起こした原因も、全く見当つかないが、現実味溢れる視界と、今なお脳に伝わり続ける体の痛みに、これは夢ではなく現実であることを否応なく突きつけられ、何ともファンタジーな事件に巻き込まれたもんだね、と受け止めた。

待てよ、ファンタジーか？ SFか？ はたまたオカルト？

うーん、そもそも、それらの境界ってなんだろう、と腕組みしつつ右手の人差し指をあごの下に当て、視線を上に向けて考えていたのだが、少々思考が脱線し始めたことに気付き、頭を振る。

(よし！ ウジウジしててもしょうがない、なんかクリア条件があるはず。それをこなすだけだ！)

胸の前で拳を握り、ガッツポーズで気合を入れる。

(でも、魔王を倒せ、とかだったらどうしよう、私には無理だ)

しかし次の瞬間、ガッツポーズは力なく垂れ下がってしまった。

何にせよ、日本に帰還するまでは椿佳として生きていくしかない、変な言動を取ればどうなるか分かったものではない、私は椿佳だと自分に言い聞かせ、再び気合を入れる。

「目が覚めたか？」

物音に気付いたのか、初老を過ぎ、そろそろ老境に差し掛かるうかという男が、扉を開き入室してきた。

頭髪の半分は白髪で顔にも皺が目立つが、ピンとした姿勢には老いを感じさせない。

眉根を寄せ、胸の前に両手を寄せ小さくガッツポーズをしている椿佳と目が合つと、男は優しげに目を細めた。

椿佳は男に向き直り、腕組みを解いてから、はいと頷き返し、男に疑問をぶつける。

「あの、ここは？」

「ここは泰寛村、わしの家だよ」

「わしの名は王泰海、ここには弟子の俊雷と住んでいる」

「陽の都からの帰り道、行き倒れていたお前を拾ったのだ」

やはりこの体は椿佳だ、知らない単語なのに知っている。これは椿佳の知識だろう。

この国の名は「秋」、首都の名が「陽」である。

王泰海といえば、桃花村の様な寒村にも伝え聞こえる拳法の達人であった。どつりでかくしゃく豊饒とした…、いや、老人というにはまだ早いか、でも昔つばいから、このくらいの年齢は十分老人か、とぼんやり考えていた。

「お主、何処から来た？ 名は何という？」

「桃花村です。私は椿佳、です」

椿佳はあわてて答え、私は椿佳、子供らしい受け答えをしないと、と再び自分に言い聞かせる。

またしても眉根を寄せ、胸に両手を寄せ、拳を作っている。
椿佳は無意識だが、どうやら癖の様だ。

「やはり、桃花村の娘か。辛かったろうが、大した傷が無くて良かった」

助かって良かったと言う泰海に、椿佳は村がどうなったのかを尋ねると、泰海の様子が陰った。

「うむ、残念だが桃花村はもう。この先、頼る宛てはあるのか？」

椿佳は無言で頭を横に振る。

「そうか、家は男二人で、家事が追いつかんでな、家の事をやっってもらう代わりに、ここに住まんか？」

「いいの？ でも、迷惑なんじゃ……」

行く宛ての無い椿佳は泰海の言葉に安堵するも、このままやっかいになって良いものかと遠慮していた。

「子供がそんなことを気にするな、それに桃花村には知り合いも居った。義鷹という男だ」

「義鷹、お父さんを知ってるの？」

突然出てきた父の名に驚き、目を白黒させる。

「そうか、お前は義鷹の娘か、わしは若いころ陽の都に道場を構えておつてな、義鷹は門下生だったのだ」

「そうでしたか。お父さんが拳法をしていたなんて、知らなかった」

「義鷹はわしの若いころの門下生で優秀な男であったが、怪我をし

て志半ばで都を去ったのだが、折を見ては挨拶に来たもんだ。ここ数年は会っておらんたが、残念なことだ」

椿佳の父は行商を生業としており、長く家を空けることが多かった。泰海とはその時に会っていたのだろうか。

それにしても、泰海のような有名人と知り合いなら、娘に自慢話のひとつもしていいだろうに、椿佳は父の口からそのような話は聞いたことがなかった。

「うむ、疲れておろうから、今日はゆっくり休みなさい」

「後で弟子の俊雷もお前にも紹介しよう」

ありがとう、そう言って椿佳は、泰海の優しい言葉に、知らず涙がこぼれた。

03 椿佳の腕前（前書き）

早く拳法アクションを書きたい。

ですが、今しばらく幼少期にお付き合いください。

03 椿佳の腕前

「具合はどうだ？ 腹が減ったろう、飯にしよう」

寝台で休んでいた椿佳は、いつしか眠っていたようで、部屋は薄暗くなっていた。

家に戻った泰海が、飯にしよう、と椿佳を起こしに来ていた。

泰海について行った食卓は夕食の支度の最中で、12歳位の少年が部屋の隣、厨房から食器を運びんでいた。

「弟子の俊雷だ。お前をここまで運んだのもこいつだ」

「椿佳です。ありがとうございます」

「いや、元気になってよかったですよ」

泰海は給仕をしていた少年、弟子の俊雷を紹介しつつ、座りなさい、と椿佳の背を優しく押して席に誘導する。

先ほど運び込んだ食器で準備は整ったのか、俊雷も泰海が席に着くの見届けてから座ると、椿佳に顔を向けて安堵したように微笑んで返した。

食卓には上座に泰海、泰海の右手側に俊雷、俊雷の向かい側に椿佳という配置で座り、部屋の奥、泰海の背後には酒の入った甕が置いてある。

(ジャッキーの映画に出てくるお師匠さんの家みたいだ、えーと、酔拳？”鉄の爪”さんが襲ってきたりしないよね？)

などと、ぼんやり考えていると、泰海は俊雷に今後のことを話し始めた。

ちなみに、”鉄の爪”は酔拳には登場するキャラクターではない。

「俊雷、実はこの椿佳は義鷹の娘でな、うちで引き取ることにした。家事は椿佳に任せて、修練に専念しなさい」

「そうでしたか、義鷹さんの…」

椿佳の父、義鷹とも面識があつたようで、沈痛な面持ちで見やる。

“鉄の爪” 襲来に思考が飛んで難しい顔をしている椿佳を見やり、今後のことを不安に思っていると勘違いしたのか大丈夫だよと微笑んでやる。

（おー、微笑み2ゲット、この微笑み王子め、それに子供を見るような優しい目じゃないか、あ、私は今子供か）

子供はこういう時、どのような反応を返すのだろうと考えた椿佳は、とりあえず微笑み返して對抗するが、返ってぎこちない表情になっていたため、この師弟には健気な娘だとの印象を与えていた。

実際のところは椿佳（彩花）としては、盗賊に襲われ、命からがら逃げ出した時のショックがトラウマとして刻まれている可能性はあるが、現時点では意識しておらず、父を失ったわけでもない。

「うむ。だが暫くは勝手が分かるまい。明日から色々教えてやれ」

「はい。任せてください！」

「ははっ、そう気張るな、さあ、食べなさい」

不安げ（に見える）椿佳を守るべき年少者と認識したのか、気合が入る俊雷に、これは修行に専念どころでは無いかな、と思う泰海であつた。

「おいしーいー！」

椿佳の体調に合わせて消化のいい粥と、良く火が通り薄い味付けの野菜炒め、鶏がらのスープが本日の献立であった。全体的に薄味にまとめられていたが、バランスの良い味付けであった。

（これを明日から私が作るのか、ハードル高いなあ）

この味を覚えようとするが、薄味であるため難しい。

パクパクと一心に食べる椿佳を見て、余程空腹であったのかと泰海は、たくさん有るから、慌てるでない、と孫でも見るような目で語りかける。

師より早く逝ってしまった嘗ての弟子に、迷わず逝けよと心で語りかける泰海であった。

（義鷹よ、椿佳の事は心配するな）

翌朝、椿佳は俊雷に起こされ炊事場に立っていた。

この師弟の朝は早く、日の出とともに修練を開始する。

「椿佳、炊事は経験有るのか？」

「はい、大丈夫です！」

椿佳の記憶では、母親を手伝って炊事場に立った覚えが有った。

ただし、包丁や火の周りのような子供には危ない事は母親が担当していたため、野菜や食器を洗う程度だったのが実状である。

彩花としてはどうであったかという点、いや、何も言わない。

そんな彩花から見て、椿佳は実にしっかりお手伝いをしている印象

が有ったため、自信満々で大丈夫と宣言してしまったのだった。

「そうか、米や小麦は後ろの籠に、牧は家の裏手に有る。水は井戸水を使ってくれ」

「はい！」

「野菜は、裏の畑で老師が食べごろの物を見つくるってくる」

「たまに俺も山に入って、山菜なんかを取ってくるから、その時は頼むよ」

「わかりました！」

「ははっ、元気だな」

椿佳の記憶を手繰り、牧に火を着けようとするがなかなか上手くいかない、見かねた俊雷が火をつけてやり、火が強くなる間に下ごしらえを済ませる。

そこまで見て、俊雷は朝の修練に出かけて行った。

三時間ほどして早朝の修練を終えた師弟は家に戻り、朝食の準備の済んだ食卓に着く。

「老師、今日から朝餉は椿佳に任せています」

「ほう、なかなか見事じゃないか」

「へへっ」

師弟の言葉に得意げに笑顔をこぼす椿佳であったが、一口、二口と食べる間に三人の表情は沈んでいった。

「うむ、まあ、なんだ、見た目はそう悪くないのだが…」

泰海はいうが、雑に切られて所々繋がっている野菜、芯の残った粥味のしないスープ、と散々であった。

後に俊雷は、まずは味見をしてから出せ、ということになるのだが、

椿佳の心境を考慮して優しい言葉を掛けておくことにした。

「椿佳、昼は何か買ってくるよ。夕餉は…、一緒に支度しようか」

「はい…、お願いします」

「これから覚えていけば良いのだ」

「はい…」

生温かい空気が食卓を包んだ。

04 村の雑貨屋で

泰海宅に引き取られて二週間、このところ漸くまともに家事こなせるようになった椿佳は、午前の修練を終えた俊雷と共に村の昼市へ出向くこととなっていた。

親を、家を、村を失うという憂き目に遭った椿佳を慮り、泰海は椿佳を人と関らせることを避けていたのだが、最近では明るい表情を見せるようになった椿佳に安心し、そろそろ良いであろうと、俊雷に村の市へ連れていくよう申しつけたのだった。

「ふー、ご馳走様。椿佳、市場へ行こうか」
「はい」

一頃を思えば元気な返事を返すようになった椿佳を伴い、俊雷は昼下りの町に行く。

時折、村の人々とあいさつを交わし、椿佳を紹介していたが、村人が椿佳に向ける眼差しに憐れみを感じ取り、二人はそれぞれ別の意味で複雑な心境であった。

俊雷と村人とのやり取りに飽きてきた椿佳は、村の様子を眺めていた。

（村って言うよりは、小さな町って感じだなー）

桃花村とは比較にならない活気に、椿佳は驚いていた。

彩花としては、村と名の付く場所に足を踏み入れたことはなく、テレビで見る長閑な風景を想起するが、それともまた異なる雰囲気だ。そういえば、このごろ椿佳この子と彩花私の境界が曖昧になってきたな、などと考えていると、雑然と商品を並べる店が目に入った。

(雑貨屋さんかな?)

食料品や衣料品などの生活用品を売る店とは異なり、土産物や玩具を並べた店内は、何とも子供心をくすぐる甘美な空間だった。

いや、子供心って、私は子供じゃないし、と言いつつも吸い寄せられるように店内に足を運ぶと、土産の置物などが置かれた棚の一角に、それらは並んでおり、寒村で育った椿佳にも、現代っ子の彩花にとっても珍しく映った。

それは椿佳の手のひらに載るくらいの、小さな四足獣の形をした白い置物で、顔や体には赤、黄、緑の鮮やかな模様が施されているのだが、果たしてこの置物は何の動物を模したものか椿佳には分からなかった。

(むう、いまいち可愛くない)

いまいち可愛くないと評を下して白い置物を戻し、次に複数の竹筒を繋ぎ合わせ、横方向に動くようにしてある蛇の玩具を手取る。左右に動かすと、蛇が進むようにクネクネと動く玩具は、ご丁寧に体の動きに合わせて口が開閉している。

(お、おー、動いた！ ははっ、楽しい！)

満面の笑みを浮かべ、しばらく一人ではしゃいでいた椿佳だったが、店の奥でにこやかにこちらを見つめる、年のころ14、5歳の少女を見つけて我に返った。

(はっ！ どうして私はこんなもの！？)

「お嬢ちゃん、一人？」

「え、いいえ、俊雷さんと…（居ない！）」

先ほど村人と話していた俊雷を探し、通りを振り返るが、俊雷は既に居なかった。

それもそのはず、往来の中で立ち止まって話をできるはずもなく、ゆっくりと歩きながら会話を交わしていたのだ。

「どうしよう、俊雷さんが迷子になっちゃった」

椿佳の言葉に、店番の少女は思わず嘖き出す。

俊雷がこの言葉を聞けば、迷子はお前だと返しただろう。

「俊雷って、泰海老師の所の？」

「え、知ってるんですか？」

「そう、じゃあ、あなたが椿佳ちゃんね」

名前を言い当てられ若干驚くが、俊雷の知り合いの様であることから、椿佳の名も伝え聞いていたのだろう。

「まあね、村の中はみんな知り合いみたいなものよ」

「それに、ここいらの子供たちは、大抵泰海老師に拳法を教えるもらってるから」

（へえ、泰海さんって有名人だね、そんなにホイホイ教えていいのかな？）

さすがは泰海さん、太っ腹だなあ、と思っていると、店番の少女は店の奥に向かって声を張り上げた。

「明星ー、ちょっとおいでー」

「なあにー」

暫くすると、店の奥から返事が聞こえ、とてとてと走ってくる少女が見えた。

年のころは椿佳と同じくらいか。

「泰海老師のところの椿佳ちゃんだって、椿佳ちゃん、仲良くしてやってね」

「明星だよ、よろしくー」

「椿佳です、よろしく」

「私は紅蘭、よろしくね」

店番の少女、紅蘭に紹介され、予想外なところで友達が出来てしまつて苦笑していると、後ろから俊雷の声が聞こえた。振り返ると、買い物済ませたのか両手に荷物を持った俊雷が歩いてくる。

「居た、椿佳、こんな所で何やってたんだ？」

玩具に引き寄せられたとは言えず、もじもじしている椿佳を見やり、ははあ、さてはと笑みを浮かべる。

「欲しいのか？」

「いや、そういうわけじゃ」

「紅蘭さん、これひとつください」

「はいよ、まいどあり」

そうして俊雷は、いまいち可愛くない、あの置物を手を取った。

どちらかというと、椿佳が夢中になった蛇は、男の子向けの玩具だった。

「え、ホントに良いですから！」

「なに、遠慮すんなって」

そう言つて俊雷は、白い置物を親指と人差し指で前後から挟み込んで二度押すと、プツプツと音を立てる。

聞き様によつては犬の鳴き声に聞こえないことも無い。

（そういう物だったのかー）

白い置物の真相に目をまん丸にしていた椿佳だったが、今度はすぐに我に返つて俊雷に礼を言う。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

家に戻つた椿佳達は、泰海と共に食卓に着いていた。

「椿佳、最近はちゃんと料理できるようになってきたな、偉いぞ」
「俊雷さんに教えてもらいましたから」

本当に明るくなって良かった、今日村に出たのも良い気分転換になったかと考える泰海であったが、しかし、と続けた。

「しかし、今日の味付けは少し濃いな、体には薄味の方が良いのだぞ?」

「はい、ごめんなさい」

その日の食卓には俊雷好みの濃い味付けの料理が並んでいた。

05 弟子入り

「俊雷、型をやってみなさい」

ある日の午前、椿佳は泰海に誘われて修練の見学をしていた。先ほどの泰海の言葉、型を見せよとは、妹弟子にお前の演武を見せてやれと言われているのだ。その言葉に俊雷は居住まいを正し、型の演武を始めた。

「椿佳、よく見ておきなさい。これが我が影手拳の最初の型だ。この中にはほぼ全ての技が詰まっている」

「は、はい！」

全てと言われれば見逃す訳にはいかない。実際は「全て」と言いつつも、それぞれの技の変化、応用、コンビネーションも重要ではあるが、確かに基本的な理念は詰め込まれていた。

(むー、何をやっているのか分からない…。あ、今はパンチかな？)

俊雷の動作を眺めるが、椿佳には時折パンチをしているのが分かる程度で、その他は何をやっているのか想像できなかった。とはいえ無理はない、通常は片手で行う受け技を両手で同時にやっていたり、自分の片腕を敵に掴まれたと仮定して空いた腕で払い退ける技であったりするのだ。

受け技に関しては右も左も動作は同じであるから、同時にやっつしまえ、というものだったが、はじめて見る人には右手と左手を交差させた状態で上下に手を動かしているだけのように見えるし、腕を掴まれる前提などは傍から見ていると分かるはずもない。

最後に連続パンチをして、俊雷が元の体勢に戻ると、泰海は俊雷に指導を始める。椿佳が見ていると、自ら型の動作をやってみせて、俊雷の手を取って「これくらいだ」と指導している。腕の角度や肘の位置、足の開き具合などなど、細かい部分にも注意点が有るようだった。

（結構細かいんだなー）

椿佳の中では、格闘技とは荒っぽいもの、即ち雑なものといったイメージを持っていたが泰海の指導は非常に論理的且つ繊細であった。

椿佳は知る由もないが、泰海の指導方法はこの世界で一般的なやり方とは一線を画していた。通常は師匠は椅子に座ってただ弟子の練習を眺めるだけで、たまに脇をもつと締める、腰をもつと落とせだのと声をかけるくらいのものである。

泰海に子供の頃から手ほどきを受けた村の若者は、実は結構強い。数日前に知り合った雑貨店の紅蘭などは、なかなかの武勇伝を持っていた。

その武勇伝の一つに、買い物に行った街で男に付きまとわれ、通りすがりの若者が助けに入ったのだが敢え無く返り討ちに遭ってしまい、痛めつけられていた所を紅蘭が逆に助けたという話があった。後日この顛末を耳にした椿佳は目を丸くし、以降は紅蘭姐さんと呼ぶようになるのだった。

「椿佳、一緒にやってみようか」

「えっ、はい！」

先ほど俊雷が行った動作を、泰海に教えてもらいながら付いてい

く。ひと通りの動作を終えた後で、動作の意味と注意点を解説していく。

どうやら、泰海・俊雷師弟の中では、椿佳の弟子入りは決定事項のようだった。

「まずは動作と順番を覚えよう。俊雷、明日からしっかりと教えてやれ」

「はい、分かりました」

(こ、この流れは…。 空気読んどいた方がいいよね?)

「よろしくお願いします。老師、兄さん」

老師と呼ばれた泰海は、弟子入り承諾と受け取って相好を崩し。

兄さんと呼ばれた俊雷は、初めての兄妹弟子に盛大にニヤけ、椿佳の中の勝手な「微笑み王子」というイメージは、一瞬にして瓦解したのであった。

06 修行の日々

その日から椿佳の修行の日々が始まった。泰海の下での修行は実に八年間続く事になる。

見学の後は昼食を摂り、午後の修練から本格的なデビューだ。

「よし、椿佳。じゃあ型の中に有った技を実際に試してみようか」「はい！」

椿佳の指導は主に俊雷が付く事となった。組手等で背丈が合わないから、という単純な理由も有ったが、教えることで俊雷の理解度を上げようという泰海の目論みも有った。身長を合わせるのは、影手拳では二人一組で行う対人練習の比重が高いためだ。もちろん俊雷と椿佳の身長差は大きい、泰海とやるよりは幾らかマシである。

「ほら、肘が開いてるぞ」

「うっ、難しいよ」

「じゃあ、攻守交替だ、良く見ておけよ？」

「はい」

元気良く返事して椿佳は掌底を打ちこむ。今二人が行っているのは、前腕部を接触させたまま、一人が掌底を打ちこみ、相手が肘に体重を乗せることでガードするという型の分解動作とも、限定的な組手とも取れる基本練習だ。肘の重圧が弱かったり、力が相手の方向を向いていないとガードの用をなさないため、打ちこまれてしまっ。

「よっ、うっ、それっ！」

攻守を交代し、椿佳は掌底を入れるどころか少しも腕を前に進める事が出来なくなってしまう。椿佳が俊雷の肘の重圧に苦戦していると、俊雷から反撃が来る始末だ。

「うっ、ずるいよ兄さん、反撃するなんて言っていない…」

椿佳が眉根を寄せて不平を言っていると、面白そうに俊雷がアドバイスを始めた。

「良いか椿佳、攻撃も防御も同じなんだ。肘に体重をしつかり載せて相手に当てれば攻撃、相手の攻撃を潰せばそのまま防御になる」

「えっ、一緒なの？」

「そうだ。肘から先の形や向きはそれぞれ違うけど、基本の突きと考え方は全部…いや、ほとんど一緒だ」

「そうなんだ」

椿佳にはどうしても同じ動きには思えなかった。しかし修行初日からそんな事が分かるようなら、この世の中には達人だらけになってしまうだろうと思ひ直し、手を動かす。

「うん、まあ、習うより慣れろ、だ。こうやって対人練習を主に行うのも、反射的に技を出せるようになることが目的だ」

「反射的に？」

「そう、頭で考えていたら遅いんだ。咄嗟に、何も考えなくても体が動くまで繰り返すんだ」

「うへー、できるかな？」

（パプロフの犬ですか、てかそれ、某最強の暗殺拳の最終奥義じゃん！）

情けない顔をして、パブロフの犬ですかと感想を持ったのだが、考えてみればそれはすごい事だと椿佳は思った。それが実現できれば反射的に動くだけで敵を倒してしまえるのだ。実際は反射だけで100%戦えるものでは無いのだが。

「できるさ。それに時間ならたつぷりある」

「そうだね、考えるな、感じる！だね」

「お前それ、…義鷹さんが言ってたのか？」

「え、あー、どうだったかな？」

何気なく某映画スターの有名な言葉を呟いてしまい、あせる椿佳だった。

半年もすると、椿佳の動きもなかなか様になってきた。対人練習で使う技もバリエーションが豊富になっている。この頃には俊雷の言っていた基本は同じ、という言葉も意味が何となく分かってきていた。

「いいか、影手拳の基本の考え方には、水のようにってのが有る」

「水って、雨とか川とかの、あの水？」

「そうだ。これから突きを出すから、止めてみる」

「はい！」

そう言っただけで俊雷の突きを受ける椿佳、しかし俊雷は肘を曲げて椿佳のガードを越えてくる。

「わっ！」

咄嗟に開いた手で俊雷の肘をガードする椿佳だったが、俊雷はさらに肘から先を延ばして裏拳を放つ。

「ぶっ！」

俊雷は椿佳の顔に当たる寸前に拳を開き、手のひらを向けて椿佳の顔を掴んだ。

「こついう事だ」

「兄さん、分かんないよ」

顔を掴み、ほっぺたをぶにぶにしている俊雷の手を、椿佳は眉根を寄せながら払いのける。しかし分からないのも仕方がない。今までに教えられた技を食らっただけだった。

「川の水は、障害物が有っても止まらずに下流に流れるだろ？」

「うん。水が積み上がってる川は見たこと無いね」

「最初の突きを止めても、勢いを殺さずに肘を打ちこんだろ？」

「そうなの？」

「…。うん、やってみろ」

椿佳は水、水と眩きながら突きを繰り返す。バシッと止められて技が続かない。

「そこから肘の勢いそのまま突き進むんだ。手が止められたら肘、肘が届かなかつたら裏拳だ」

言われた通り、突きを止められてから肘を曲げて次の攻撃に続ける。最初はぎこちなく形をなぞっていたが、何度か続けるうちに徐

々に要領を得てくる。

「あつ、なんか分かったかも！」

「そうそう、大分良くなってきたぞ。その調子、才能有るんじゃないか？」

「えへへっ」

すっかり飴と鞭を使い分けられている事には気付かず、俊雷に褒められてご機嫌の椿佳だった。好きこそもの上手なれ、である。必要に迫られ、必死に修練するものは強い。しかし拳法が好きで修練するものはもっと強い。それが泰海の指導方針である。

泰海より経験の浅い、言い替えれば椿佳に近い俊雷に指導させるという泰海の方針は成功していた。達人の域にいる泰海では気付けなくなってしまうた初心者故の悩みという物を、俊雷は的確に指導していた。

こうして、椿佳の修行の日々は続いていった。

07 忍び寄る黒い影

「ひいひい！」

夕闇迫る午後の厨房で、第一の悲鳴が上がる。声の主は椿佳。午後の修練を終えて厨房へ入り、夕食の支度中の出来事であった。

「まさか、こんな世界にもヤツが居たなんて」

雑食の魔王、天性の忍者、たまにはアルファベット一文字で表されることもある恐怖の存在が、今椿佳と共に厨房に存在するたった二つの生命だった。誰にも助けは求められない。そのアルファベットで表わされる存在は、例外なく最強。椿佳が知るだけでもその名で呼ばれる存在は三つ。ただし内二つは架空の存在では有ったのだが。

おろおろとしていた椿佳だが、このままでは夕食の支度ができない。人類の敵と戦うため、悲壮な決意を固めて敵が潜んだ物陰に向き直る。

「どうしよう、新聞紙！ は無い！！！」

悲壮な決意に表情を固くする椿佳ではあつたが、獲物も無く素手で奴に挑む勇氣は無かった。しかし日本では定番とされる有効な武器は、この世界には無い。敵に対する有効な攻撃方法を考えて眉根を寄せるばかりだ。

（下手に刺激すると、ヤツは顔を狙って来る！！）

それだけは何としても避けたかった。やや距離を取りつつ有効な

手段を考える。と、椿佳の背が食器棚にぶつかった。有る意味では、椿佳は厨房の隅まで追いつめられた。物理的な攻撃を受けた訳ではない。精神的なプレッシャーだけで厨房の隅まで追いやられる、恐ろしい敵だった。

(こうなれば、イチかバチか！)

椿佳は大皿に手をかける。これは最終手段。もうひとつの最強の得意技……遠距離からの狙撃、彼ならば二キロ先からターゲットの頭を打ち貫くだろう。椿佳は火を吹く事は出来ない、極限状態の椿佳には、もうそれしか方法が思いつかなかった。

「何やってるんだ、椿佳？」

「兄さん！ ヤツが！ ヤツが居るんです！！」

修練を終え、水を飲むために厨房へやってきた俊雷が食器棚に背を預けて青い顔をしている椿佳に声をかけるが、椿佳の言葉を聞いて眉をしかめた。

「ヤツって何だ、ヤツって。女の子がそんな言葉を使うもんじゃない」

「そんなこと言ってる場合じゃ……」

「だから、何なんだ」

「やあつ、そこおおお！」

はつきり物を言わない椿佳に業を煮やし、近づいていくと椿佳は俊雷の服の裾を掴み悲鳴を上げた。物陰から奴が動いたのを見てしまったのだ。

「なんだ、ゴキブリか」

「ひゃ！（掴んだ！ 手で掴んだ！！）」

俊雷は、つかつかと歩いて行っただかと思つと、ひょいと事も無げにゴキブリを掴み込んで窓から外へ放り出してしまふ。素手でゴキブリを掴んだ事にシヨックを受けた椿佳だが、この時代の人間にとつてはごく当たり前のことであり、逆にその程度の事に怯える椿佳の方が余程變つていた。

「あ、ありがとうございます」

「何だ、あんなものが怖かったのか？ 變つた奴だな」

「何か手伝おうか？」

「ううん！大丈夫だから、可及的速やかに手を洗つて来てください」

両手を突き出して手のひらを左右に振り、全身で拒絶を現した椿佳に気分を害した俊雷だが、その姿を見て何を思いついたのか、にやりと笑い両手を椿佳に向けてにじり寄る。

「ほほー、そんな事を言うのはこの口か！」

「いいいいやあああああああああ！」

俊雷はゴキブリを掴んだその右手を、今度は椿佳の頬を掴むために素早く繰り出すが、日頃の練習以上に椿佳の反応は早く肘を抑えて防御されてしまふ。

「おっ、やるな？」

「ひっ、わっ、とっ！」

予想以上の、二重の意味での良い反応に俊雷は左手も繰り出し、連続突きならぬ連続アイアンクローほつぺた版を見舞うが、今度は内側から手の甲で前腕部を抑えられて防御された。その後も右、左、

右、左と攻撃を繰り返すが悉く防御する椿佳。

「はははー、こいつー」

何やら楽しくなった俊雷は手首を旋回させることで椿佳の右腕を逆に抑え、左手の制空権を確保すると右手での猛攻を開始する。

厨房に酒を取りに来た泰海は偶然二人のじゃれあいを目撃した。めまぐるしく立ち位置を変え、ずいぶん手加減されてはいるが俊雷の動きについて行っていた。

（ほほう、ここへ来て二年、椿佳も良い動きをするようになって来たな）

椿佳としては、ゴキブリに触った手を回避するため常に無い反応を見せているだけだが、事情を知らない泰海は弟子の成長に目を細めるばかりで助け舟を出す様子は無い。

「椿佳ちゃん、おすそ分け。あ、泰海老師、こんばんは」

「おお、明星か。どうしたんだ？」

「父が魚をたくさん釣って来たんですが、食べきれないので、お裾分けに来ました」

「いつも澄まないな。お父さんに宜しく言っといてくれ」

お裾分けに訪問した雑貨屋の娘で椿佳の友人の明星は、必死の形

相で攻防を続ける椿佳を眺めながら、泰海と平和な日常風景を作り出していた。

「椿佳ちゃんすごいですねー」

「うむ、目を見張る成長だな。今後が楽しみだ」

じりじりと厨房の隅に追いやられつつある椿佳と追いつめる俊雷を二人は微笑ましげに眺めつつ、三匹の魚が乗ったざるを受け渡す。

（見てないで、助けて！）

のほほんとした空気を作っている二人に、助けを求める視線を送る椿佳だったが、全く気付いてはもらえなかった。

「ほほー、よそ見とは大した自信だな、っと」

俊雷は右手で椿佳の左腕を下げさせ、左手で椿佳の右腕を掴んで下に降ろさせた左腕に肘の位置で重ねさせて押さえてしまう。さらに右足は向う脛で椿佳左足を抑え込む。半身になっていた椿佳は両手と両足を押さえられた上に背後の壁に縫い付けられ身動きが取れなくなってしまう。

「うむ、終わったようだな」

「やっぱり俊雷さんには敵いませんね」

「それはそつだ。修業期間も背丈も違う」

泰海の言葉に、それはそつかと思ひ直す明星だが、ひとつ疑問を口にする。

「やっぱり、女の子じゃ強くなれませんか？」

「なんだ、明星も強くなりたいのか？」

「いえ、うちの姉さんは武勇伝は凄いけど、本当なのかなって思いました」

明星の姉の紅蘭は、言い寄る男を伸ばしてしまったという類の武勇伝を幾つも持っているが、本当にそんな事が出来るのか不思議だったのだ。

「もちろん力では敵わんだろうが、やりようによっては不可能では無いぞ」

「本当ですか？」

「うむ、今の俊雷を見ただろう、あれは力で抑えつけた訳では無くて、椿佳の力をつまく利用して体勢を崩し、力が入らない体勢をつくっているのだ」

見ると、椿佳の足は俊雷の足に浮かされて地を掴んでいない。あれでは力の入れようも無いだろう。

俊雷は徐に右手を椿佳の顔に近づける。椿佳はゆっくりと迫りくる魔手から目が離せず、力無く首を左右に振る。

(やめて、マジでやめて)

しかし非情にも俊雷の右手は止まることなく、椿佳の頬を親指と残る四指で両側から挟み込んだ。

「ひっ、うっ」

大粒の涙を浮かべた椿佳に、やばい、と俊雷は慌てて掴んでいた手を離し、椿佳を壁から解放する。しかし椿佳は動かず、時折ひつくと肩を上下させるばかりだった。

「う、ごめん、悪かった」
「……」

雲行きが怪しい二人の雰囲気に泰海が訳を聞くと、明星はゴキブリをそこまで怖がる椿佳の感覚は理解できないものの、嫌がる女の子を追いつめるなんて何事ですかと怒りだし、泰海は笑っていた。

「椿佳、さっきは良い動きをしていたぞ。いい修行になったと思って許してやれ」

言っと、ぼろぼろと泣き続ける椿佳の口に飴玉を一つ放り込む。

(こんなので機嫌が治ると……あ、おいしい)

眉を八の字にしてぼろぼろと涙をこぼす椿佳だったが、コロコロと二度飴玉を転がすと表情が緩み泰海を見上げる。泰海はぽんぽんと椿佳の頭に手を置くと、部屋に戻って行った。

「老師、兄さん、ごはんの準備ができましたよー」

夕食の支度が整った事を告げると、程なく二人が集まってきた。椿佳は満面の笑みで俊雷に小さな皿を差し出した。

「兄さんには特別メニューを追加です」
「……」

メニューとは何だ？と訝しんだ俊雷だが、椿佳が良く分からない言葉を発することはたまに有ることなので気に留めず、差し出された品を見ると小ぶりの焼き茄子。ただし両側面に三本ずつの短い串を突きさし、先頭部に長めの串が二本差されており、串はご丁寧に黒く焼き色を着けられていた。

「うん、ありがとう」

言つと俊雷はひよひよいと串を抜き、茄子を口に放り込んでしまつ。精神的なダメージを与えられなかった事は残念だが、此処までは椿佳も予想済みで、俊雷の反応をにやりとして待つ。

「辛っ！」

「今日の特別訓練のお礼です、兄さん、ちゃんと食べてね？」

茄子の中にはたっぷりと辛子が仕込まれていた。

08 はじめてのおつかい

青葉目に染む初夏の夕刻、いつもの修練を終えた三人は、椿佳の用意した料理を囲み話していた。

「椿佳は近頃拳法も料理も腕を上げたな」
「えへへ」

褒めて伸ばす師匠と兄弟子に、そうとは知りつつも褒められて嬉しい椿佳はにやけた顔で照れ笑いをしていた。散々な異世界初日を経験したが泰海の下に来て六年、師匠と兄弟子、周囲の環境に恵まれた椿佳は真つすぐ育っていた。

日本での年齢を加算すると二十二歳となり、真つすぐ育つというのも語弊が有るが、言わぬが花である。

「そうだ俊雷、剛山の所へ届け物をしてくれんか？」
「いつもの漬物ですか？」
「うむ。春に届けてもらった酒の礼だ」
「良徳さん、お酒は揺れて大変たって言ってたねー」

剛山とは泰海の弟弟子で、影手拳に様々な武術を取り入れ足技を主として使う武影脚という門派を開いた人物である。その剛山と泰海は、剛山が独立して一門を開いてからも付き合いを続けており、互いに年に一、二度は弟子を使い贈り物を交わす間柄だ。良徳は剛山の弟子である。

泰海と俊雷が椿佳を拾ったのも、この師弟が剛山に会うべく王都・陽に赴いた帰り道であったのだ。その折は俊雷がまだ十二で一人行かせるには心もとない事もあり二人連れであったが、俊雷が十五の

年からは俊雷が一人で行くこともあった。

「椿佳ももう十四だ。今年は椿佳も連れて行け」

「えっ、私も？」

「剛山老師は椿佳がお気に入りですからね」

「旅かー、わくわくします！」

女の身ということ、何かあつては大変と今まで椿佳を連れていく事は無かったのだが、近頃の上達ぶりを見てそろそろ外を見ても良い頃と椿佳を使い遣る事を決めていた。

現代の感覚では幾分過保護に過ぎないかと思わなくもないが、大きな街からいざ知らず、野を行けば官兵の眼は届かず、盗賊の跋扈する場所に女の身で旅することは大変危険な世界である。さらには旅となると、現代日本のように公衆トイレやコンビニが有るわけでもなく、花摘みにも気を使う。

秋国は巨大な大陸の東に有る。大陸の西半分は異民族の国家群が治めており、交流は殆ど無い。大陸の南東部はかつて凌という大国であつたが、現在では主要三力国とその属国に分かれたれ、秋国に暮らす人々と近い人種の民族が治めている。秋国の領地はその凌文化圏の東南部に位置し、凌文化圏の三分の一弱を占める主要国家の一つである。三分の一とはいえ、端から端まで歩くのに一カ月以上必要な程の広さである。

そのような広大な国土で治安を維持する事は難しく、泰海の心配も当然であつた。

「そうだな。椿佳を気に入って色々仕込んでたな、今年はこちらから出向いてたつぷり教えを請うて来い」

「はい！剛山老師の足技はかっこ良いですからね」

「何だ、椿佳は武影脚の方が良いのか？」

「えっ、そうじゃ無いけど、影手拳にはあんまり蹴りが無いから、やっぱり両方使えた方が良くなってる……」

泰海の言葉に軽口で応えた椿佳だったが、泰海の返しが孫娘に冷たくされた老爺のような雰囲気ですぐに困ってしまふ。普段は厳格な師匠であるが時折おどけた調子を見せる泰海を椿佳は本当の祖父のように慕い、全幅の信頼を寄せていた。

泰海は昨年、訓練中に腰を痛めてから急に老け込んでいた。その後の修練ですっかり以前の動きを取り戻す程に回復していたのだが、六十を間近に控え、腰の調子が悪い泰海は今回の陽行きを見合わせおり、一抹の寂しさが表れたのだろうか。

「老師、拗ねないでください」

「ははは、冗談だ」

「では、一人一糞背負って、陽まで遠駆けで行ってこい」

困った椿佳に俊雷が助け舟を出し、冗談だと笑った泰海は指示を出す。これも立派な修行なのだ。

椿佳達の暮らす泰寛村から陽まで、一般の足で七日の距離である。俊雷と椿佳はその行程を糞を背負って四日で駆ける予定だ。これは馬で移動するような日程なのだが、日頃から特殊な遠距離走の訓練をしている二人ならば可能である。実のところ、俊雷だけであれば二日で十分なのだが、椿佳に合わせた日程を組んでいる。

出発は漬物が馴染む二日後と決まった。

そして出発日の早朝、これからの行程を前に入念に体の筋を伸ばしている二人を、夜が明けて活動を開始した雀たちと共に見送る。出発までの二日間で、道中胡乱な輩と遭遇しても対処できるようにみっちり椿佳を鍛え、宿題まで出した泰海は尚も心配顔である。急に色々と教えたところで付け焼刃ではあるのだが、そこは親心である。

「二人とも、気をつけてな」

「はい、それでは行つてきます」

「老師、私達がないからってお酒は程々にしてくださいね」

「わかるとるわい」

師匠としての威厳を保つように表情を引き締めて言う泰海は、走り出した二人の背に思い出したとばかりに大声で言う。

「帰りは酒を一人一甕背負つて、遠駆けだぞー」

(帰りは液体！ 揺れて走りにくそう)

さらなる宿題と泰海の実益を兼ねた指令に、早くもげんなりする椿佳だった。

09 陽の都

初夏の荒野を駆ける二つの影。先行する青年に少し遅れて小柄な少女が続く。二人は泰寛村から東へ、一路陽の都を目指して駆けていた。

途中、椿佳の出身地である桃花村に立ち寄り、今は亡き椿佳の父、義鷹の墓前にて近況を報告し、引き続き師の弟子を訪ねる旅を再開した。

「兄さん、待ってー、休憩、ちょっと休憩しよう！」

「だめだ。忘れたのか？これも修練なんだぞ。もう休憩は無しだ」

遅れる椿佳の泣きごとには一顧だにせず駆け続ける俊雷だったが、ここまでの道のり全てを厳しい態度で臨んでいた訳ではない。どこるか初めて参加する椿佳を慮り、いつもより多めに休憩を取っていた程だ。しかしその事で少し到着予定を越えてしまっていた。

「だって……、糞が重いよう」

「もうちょっとだから、頑張れ！」

長距離の移動では、例え藁の一本であろうとも荷物の有無は疲労度に多分に影響する。そう大きくないとはいえ、二人の背負った糞は馬並みの速度で走り続ける椿佳の体力を奪っていたが、これ以上休んでいる暇は無い。加えて陽は間近、あとひと踏ん張りだ。

陽のさらに東側には対岸が霞んで見えなくなるほどの大河が流れ、風が、陽が近い事を知らせていたのだ。荒野を走る俊雷の頬に当たる

「見えてきた。椿佳、あれが都だ」

「うう、やっと見えてきた」

そうこうしているうちに、陽の都が二人の視界に入った。湿度のせいでその姿は霞んでいるが、大きな街だ。近づくにつれその全容を現した陽の都は、椿佳がこの世界では見た事も無いような規模だった。

南北に約八・五キロ、東西に九キロの威容を誇る陽の都は十メートルほどの城壁で囲まれた城塞都市だ。今なお成長を突ける都市は城壁の外側にまで民家が立ち並び、城壁の内外を合わせて大凡八十万人の人々の、日々の営みを抱えているのだ。

「うわー、おつきい！」

都の威容に興奮し、疲れも忘れて駆ける椿佳だった。

やがて城壁外の町に到着した二人は走るのを止め、往來を行く人々に歩調を合わせる。暫くは興奮して疲れを忘れていた椿佳も、代わり映えのしない街並みに飽きて落ち着きを取り戻した。その様子に俊雷は、そろそろかな、と視線を巡らす。

「兄さん、もう駄目、歩けないよ。ちょっとお茶飲んでごうよ」

「しょうがない奴だなあ」

「あそこ！あの店に入ろう」

俊雷よりも先に、目ざとく茶房を見つけた椿佳は、言葉に反して嬉々とした表情で俊雷の腕をつかんで茶房に引っ張っていく。俊雷も城壁を目前にしてこれなら大丈夫だろうと、苦笑いを浮かべつつも今度は休憩を許した。

「いらつしゃい！何にする？兄さんたち今日は泊ってくのかい？」

「お茶！お茶ください！」

「宿はいい、俺も茶を一杯もらうよ」

席に着くなり額から卓に突っ伏した椿佳だが、給仕に顔だけを上げて茶を注文した。だらけきった椿佳に呆れつつ、俊雷も茶を注文する。

「あいよ。お茶受けに菓子はどうだい？ おいしい月餅が有るよ」

「すぐに剛山老師の下へ行くんだ。止めときなさい」

「はい」

月餅と聞いて一瞬表情を輝かせる椿佳だが、俊雷に窘められ今度は顎から卓に突っ伏した。

「なんだ、剛山さんの所へ行くのかい？」

「ああ、たった今都に着いたばかりで、ちょっと一休みさ」

城壁内に居住しているはずの剛山の名を聞いて若干驚く椿佳に反して俊雷が事もなげに応えた。剛山の顔の広さには慣れっこなのだろう。暫くして茶を乗せた盆を持って給仕が帰ってくると、茶とこゆっくりという言葉を残して引き揚げた。

「ふいー、生き返るうー」

「まあ、良く頑張ったよ。何とか予定通り二日で来られたしな」

「でしょ？でしょ？ 頑張ったご褒美に茶菓子頼んじや駄目？」

「だーめ。それに本当ならもう少し早く到着するつもりだったんだ。急がないと夕食中にお邪魔することになるぞ」

調子に乗った椿佳にしっかりと釘を刺す俊雷。流石にこれ以上遅れるわけにはいかず、一服してすぐにも出発するつもりであった。

「だって、昨日も今日も甕を背負って一日中走ったんだよ？もう体がガタガタだよ」

「そうだな、今までこんなに連続で走り続けた事は無かったからな」
「そうだよ。凄い頑張ったよ」

「でも駄目。それに剛山老師の所に行けば何か出してくれるだろう」
「ホント？」

いつになく食い下がる椿佳に飴をちらつかせると、途端に椿佳の表情が明るくなった。昔からの飴と鞭育成法は今でも健在だ。

「ああ、あの人は椿佳に甘いからな」

「ははは、私は甘々大好きだけどね」

「二週間滞在するけど、食べ過ぎて太ったら帰りが大変だぞ？」

「うう、気をつけます……」

くるくると表情を変える椿佳に癒されつつ、決してそれを外面には出さずに本日何本目になるのか分からない釘を刺して茶を含むと、俊雷は茶房の奥、俊雷の背後側から緊張を孕んだ空気を感じ取った。椿佳も椅子に凭れかかったまま両手で茶碗を持ち、ちらと奥の様子に目をやる。

「ちよつと兄さん、顔貸してくれるかい？」

「なんだあんた達は」

「へへっ、仲間がアンタに世話になったってね。ちよつとお礼に来たんだよ。なあに、すぐに用は済むさ」

恋人同士と思しき二人連れに、少々、いや、かなり変わった風体の三人組が絡んでいた。俊雷と同じ年格好の青年と、青年の子分らしき少年が二人。

「兄さん、あれ」
「ああ、気にするな」

うろたえる椿佳に俊雷は振り返る事も無く切り捨てる。椿佳が気にかかったのは青年の風体である。明らかに、周囲の人々とはかけ離れた人相風体。

が、そうも言っていられなくなって来た。絡まれていた青年が立ち上がり、正に一触即発といった雰囲気である。

「でも、兄さん、あの変な格好の人…」

「ちよつと変わった格好で目立とうとしている、ただのチンピラだよ」

茶房の奥からは人が倒れ食卓にぶつかる音と、周囲の客の悲鳴が聞こえる。

「いや、そうじゃなくてね、あの人、放っておいたら大変だよ」

「関わりとメンドクサイ。どうせ大した事も出来ないだろうから、放って置けばいいよ」

「だから、そのチンピラさんが大変なの」
「ん？」

漸く俊雷が振り返ると、異様な風体の青年が倒れ、キザな青年が見降ろす格好で着衣の乱れを正しつつも、倒れた男に蹴りを入れていた。蹴り続けるキザな青年の左腕には恋人と思しき少女がすがりつく。

「放っておいたら殺されそうだよ、あのチンピラさん」

椿佳は指差し、のんびりと告げる。俊雷は青年の風体に何だあい

つとは漏らしながら漸く席を立ち、椿佳も俊雷に続く。椿佳は男の風体に非常に興味をそそられ、いつ、どこから来たのか、……帰る宛ては有るのか聞きたくてしょうがなかった。

「くつ、お前ら、俺に構わず逃げろ！」

「兄貴い！」

「そんな、兄貴、オイラそんな事出来ないよ」

倒れた青年に駆け寄り膝を付いて手を差し伸べる二人の少年。その間にも青年は蹴り続けられている。その状態で会話をすると、有る意味とても頑丈な体だ。

「良いんだ。俺はお前たちの思い出の中で……。そうだ、レイラに済まないって伝えてくれ」

「兄貴い……」

「レイラって誰だよ！」

喜劇を演じる三人は放置して、椿佳は俊雷の背中に隠れるようにして顔だけを出からキザな青年に話しかける。

「まあまあお兄さん、そろそろ許してあげなよ。それ以上はその、死んじやうから……」

「何だお前は。余計な口出すなよ！」

激昂していた青年は、俊雷に掴みかかるが、ひょいっとかわされてしまい、目標を椿佳に変えて再び掴みかかる。

椿佳もひらりと青年の腕をかわし続け、背後から俊雷が青年の腰を軽く押すように蹴ると、青年はバランスを崩してたたらを踏む。

「うお！？ チツ、二度と偉そうな口きくんじゃないぞ」

これだけ暴れて触れる事も出来ない二人を強敵と見て、捨て台詞を残して少女と共に去って行った。

「へへっ、良いパンチ持ってやがるぜ」

よろり、と青年は折れた歯を吐き捨てつつ立ち上がった。膝が笑っているようで少年二人が両脇を支えている。

「ねえねえ、大丈夫？」

「おう、嬢ちゃん。心配いらねえぜ。オイラはグラスジョー。この辺じゃちったあ名の知れた悪^{ワル}なんだぜ」

「グラスジョーって……」

心配して青年に話しかける椿佳は、青年の名前に再び衝撃を受ける。何しろ英語だ。

グラスジョーと名乗った彼の風体は、彩花が居た世界の前世紀の不良風。革ジャン、ジーパン、革ブーツに金髪のリーゼント。コーカソイドの顔立ちに青い目。どうして秋国に居るのか不思議だが、周囲があまり気に留めていない事がさらに不思議だ。それよりこの時代にどのようにして髪型をリーゼントに出来るのか。考え出して椿佳は絶句した。

「それで、何で喧嘩なんか吹っ掛けたんだ？その、弱いのに……」

グラスジョーの特異さを俊雷までもが流してしまっている状況に、椿佳は目を丸くして俊雷を凝視するが、グラスジョーは構わず事情を話します。

「へへっ、情けねえ話だが、仲間の姉ちゃんがあいつに入れ揚げち

まっつてね、騙されて貢がされてんのさ。オイラあ我慢できなくなつてよ」

「あんまり無茶するなよ」

思った程悪い奴ではないな、と俊雷は安堵した。思わずではあったが、本来ならば絡まれた青年に加勢することは有っても逆は無い。密かに俊雷は自分の行動が正しかったか疑問を持っていたのだ。

「へへっ、男には、引けない時つてのが有るもんさ……」

「いや、まあ何だ、程々に頑張れ、な？」

「あんがとよ兄さん」

俊雷とジヨーが話している間、椿佳はまだ絶句していた。と、茶房に先ほどの青年が敵つい男を連れて戻ってきた。だらしなく着崩した衣服に太い金の首飾り、どう見てもその筋の人間である。

「居た居た。こいつらだよ」

「おう、お前らか。ちよつと面貸しな」

「もう終わった話だ。それにそつちの男は怪我ひとつして無いんだから、もう良いだろ」

「そつという訳にはいかねえよ。こつちは訳も分からず喧嘩吹っ掛けられたそつじゃないか、ちゃんと筋は通さないとな」

男は俊雷達を見て凄んで見せ、俊雷の言葉に耳を貸す様子は無かった。やれやれ、しょうがないなと俊雷は密かに肩の関節を解している、ヤクザ者を見たジヨーが前に出る。

「お前は、豪衛一家の……」

「何だジヨー。またお前かよ。冗談は名前と格好だけにしとけよ？ 冗談じゃ済まなくなるぜ」

ジョーを見て顔をしかめるヤクザ者。どうやらこの二人は因縁浅からぬ関係のようだが、ジョーの存在に違和感を持つ者が初めて現れたことで椿佳は少し安心した。

「豪衝一家が絡んでるとなりや、意地でも引けねえな」

「調子に乗るなガキが！」

ジョーに向けて拳を振り上げる男の前に俊雷が立ちはだかり、拳をいなす。突然前に現れた俊雷に驚きながらも男は俊雷を威嚇する。

「何だ手前えは！」

「俺か？俺は劉俊雷。只の通りすがりだ」

「通りすがりが口出すんじゃねえ！」

「そうはいかない。見るからにヤクザ者のアンタが出て来たんだ。見過ごせないな」

「痛い目見ないと分からないってか、ああん？」

どうやら引く気は無いらしいと俊雷は腹を決め、無駄に距離を詰めてくる男を一度突き放す。顔を近付ける男が鬱陶しかったのだ。

「兄さん、やっちゃえ！」

「だから関わるなって言っただんだ」

「大丈夫！もうバッチリ関わっちゃったよ。毒食らわば皿までだね！」

復活した椿佳は俊雷に声援を送り、外野に徹する様子だ。俊雷はため息を漏らしつつも男に向き直ると、性懲りもなく無駄に距離を詰めてくるどころだった。

なぜこういう輩は間合いを無視して近づくのか俊雷には不思議で

ならなかったが、男に顔を近づけられて心地良いものではない。遠慮なく伸してやろうと両手を突き出し構える。

「俺はこつちのガキをやる。お前はそつちの跳ねっ返りを黙らせる」
「はい、兄貴」

キザ男の返事に椿佳は、真つ当な職に着く人間ではないのかと確認する。ヤクザ者を連れてきたとはいえ、一般人に拳を振るう訳にはいかないのだ。ともすれば彼らは守るべき者なのだから。

「なんだ、あなたもヤクザさん？じゃあ遠慮は要らないね」
「何だこのガキ！」

一歩助走を付けるように飛びかかるキザ男だが、椿佳は自身の軸を少しずらして男の腕を引き、バランスを崩させる。本日二度目のたたらを踏んだ男が椿佳に向き直った所を見計らって椿佳が踏み込んだ。

「えい」
「っ、っ……」

椿佳はキザ男の肝臓に左手の掌を打ちこみ、続いて鳩尾に右の拳を打ちこむ。拳を打つ際左手は男の右手をとらえて引き込みつつ打ちこんでおく。引く力と衝く力の相乗効果で打撃力は倍加された打撃にキザ男はうめき声を発してうずくまる。暫く呼吸が出来ず苦しんだ後に気を失うだろう。

「ガキがっ、世間つてもん教えてやるぜ」
「それは楽しみだな。どうせ碌な世間じゃないんだらうけど」

俊雷は相手が動くのを待つことなく一步で間合いを詰め、鳩尾に右の掌を繰り出す。一瞬の出来事だった。

「ふんっ！」

「ふっ、う……」

鳩尾への打撃で呼吸を封じられた男は膝から崩れ、床に両手をついて蹲ると数秒後には頭から床にくずおれた。実にたわいないものである。

「あんたら、凄えなあ」

「大した事は無いよ」

「奴らは豪衝一家つてヤクザ者で、色々悪い事を平気でやってやる。オイラ仲間も奴らには稼ぎを絞り取られてる有り様さ」

ふむ、と俊雷は一つ考える。ヤクザ者では無いにしてもジョーの身なりからは真っ当な民の暮らしを連想できなかったのだ。

「とはいえ、お前たちも真っ当な仕事はしていないんだろう？」

「冗談じゃねえ、オイラの仲間たちやあ孤児ばかりだけど、力あ合わせて生きてんだ。お天道様に顔向けできない事なんざあ、何もしてねえさ」

兄貴分として豪衝一家の搾取から孤児たちを守っているというジョーに、何とかしてやれないものかとの思いに駆られる俊雷と椿佳だが、では豪衝一家の構成員を殴り倒して何とかなるかといえは、否であるう。そして陽に残って孤児たちを守り続ける訳にもいかない。

「兄さん、何とかならない？」

「この街の問題だ、俺たち余所者が口を挟む事じゃない」

考えあぐねた椿佳は俊雷に意見を求めるが、にべも無い。俊雷とて気持ちは同じだが、どうしてやることもできなかつた。

「へへっ、俊雷兄いの仰る通り、これはオイラたちの問題さ。嬢ちやんが心配することあ無えよ」

「変な呼び方をするな」

二人は茶房の主人に詫びを言い、ジョーたちと別れた後に剛山の下に向かった。剛山に相談すれば何とかなるのではないか、椿佳の往来に行く足は知らず早まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281t/>

秋国に舞う迅影

2011年9月9日22時21分発行